

12月

【収蔵品紹介】  
岡本半溪著『草花木竹盆栽培養法 全』

(魁眞書楼、明治27年)

本書は明治27年(1894)4月に、著者の岡本半溪、発行人の井口松之助によって発行された盆栽の培養法を解説した書籍です。岡本半溪は本名を岡本敬之助といい、後に純へ改名し、岡本半溪や半溪散人の号を持ちます。徳川幕府の時代には御家人であり、明治時代に入り、彼はイギリス公使館の日本語書記として勤めました。この間、公使館の庭師の下で学び、西洋と日本の方式を折衷し、草木の培養方法を網羅して本書を出版したことが、巻末の書誌情報に書かれています。



『草花木竹盆栽培養法 全』表紙



『草花木竹盆栽培養法 全』序文



『草花木竹盆栽培養法 全』口絵

す。今回は、本書の特徴や当時の盆栽の姿について見ていきます。

なお、発行元である「魁眞書楼」は井口松之助が営んでいる書肆です。国立国会図書館のデジタルコレクションで検索すると、この両名による出版物は、盆栽や盆石をはじめ、料理、鳥の飼育、相撲、占い、軍歌などジャンルが多岐にわたっていて、著者達の趣味教養、関心の広さが窺えます。

また、劇作家の岡本綺堂(本名岡本敬二)は岡本半溪の長男で、彼は父に連れられて劇場に出入りしていたことから、劇作家を目指したといえます(『国史大辞典 第2巻』吉川弘文館、1980年)。このことから、父子ともに芸術への関心が高かったことが推測されます。

さて、本書で目を引くのが、色鮮やかに描かれた表紙と、巻頭の口絵です。表紙には、素焼き鉢のアジサイや、染付鉢の牡丹と石付き盆栽らしき鉢が描かれています。口絵には、縁側に当時流行した

下へ運搬することが困難であるため、草木に適した土や肥料をつくることで「草木を欺き生育」させると述べ、そのためには出所と土質を知ることが説いています。盆栽の培養は、草木の産地とその環境について知ることが重要であると、岡本半溪は考えていたようです。

また、「山林採葉の事」では、「珍卉異草」「つまり「奇品」といわれる珍しい草木が欲しいときは、植木屋で購入できるものは他者も所有している物であるため、「遠く深山幽谷」で自ら探すことを勧めています。「口の有する草木にして、人の有せざるものあらば、初て珍卉異草と自負して可なり。」とあり、珍しい草木が珍重され、これを求めて山奥まで分け入っていたようです。加えて、本書には「世間奇品と称する草木名称の事」や「梅桜奇品名称の事」の項目があり、「奇品」について多くのページが割かれています。「奇品」の愛好は、元禄期頃に流行し始め、武家を中心に広まっていったといえます。江戸時代には、高値で取引されるほどの流行を見た「奇品」愛好ですが、管見の限り、本書刊行以降の盆栽を題する書籍では、「奇品」としての記述が

蘇鉄の盆栽、庭に幕末明治期の文人が愛好した赤松の文人木や染付鉢の盆栽が置かれている風景が描かれています。本文では、「染付の鉢は水乾き易く又水滞り勝のものなれば、素焼の鉢より水加減に注意すべし。」とあり、水はけの良さから、「鉢は素焼のものを第一とす。」と述べ、江戸時代に主流であった染付鉢よりも、現在主流である素焼き鉢の使用を提唱しています。当時流行した蘇鉄や文人木が描かれていることから、江戸時代の面影を残しつつ、現在へと通じる盆栽の姿に移行していたことが窺えます。

次に、本書の内容を見ると、最初の項目は「土を撰む事」で、「盆裡に於て草木を培養せんとするには、先づ其性質に適する土を撰むを以て第一とすべし。」と書き出しています。4項目の「草木盆栽の事」で、「都て草木を盆裡に培養するには其産地の地味を察し、之れをして産出地と同様の土を知らしむるにあり。」とも述べており、盆栽の土や肥料、置き場所について、産出された土地の環境に近い状態にすることを繰り返して主張しています。薩州(現鹿児島県)や北海道の草木を育てるに際し、その土地から土を都

なくなる傾向がみられます。本書に「奇品」愛好の影響が見られることは、江戸の園芸愛好の文化が色濃く影響していると考えられます。

「奇品」愛好の影響については、本書の執筆にあたって参考にした書籍からも窺えます。参考とした書籍については、陳湊子著「秘伝花鏡」(清朝)や聖祖救撰「群芳譜」(明朝)、伊藤伊兵衛撰「地錦抄」(元禄)、宝永、享保)、岩崎灌園著「草木育種」(文化)、「水野花鑑」(水野忠暁「草木錦葉集」(文政)が挙げられており、いずれも江戸時代に読まれた園芸書です。また、序文には執筆の目的が述べられており、中国や日本の種樹家の書籍では、盆栽の培養には不十分のため、これらを折衷し、自身の意見を加え、疑わしいことを正したといえます。中国や日本の江戸時代の園芸知識を下地として、盆栽の培養法を整えようとする姿が窺えます。

以上のように、本書は、江戸時代の園芸や「奇品」愛好の文化に生きた著者により、現在へと通じる新たな盆栽の姿への移行を知る好個の資料といえます。

(当館主事 立石見雪)